

あゆみ通信

VOL. 152

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

おかげさま

真城義磨先生



私たちはどうなったら幸せだと感じるのでしょうか。欲しいものが手に入ったとか、思った通りに物事が進んだとか、抱えていた嫌な問題が解消したとか。いずれにしても、求めていることが自分に都合良く実現することや、自分の予定通りに物事が進むことで幸せを感じますね。つまり、要求が都合よく充足されたときに満足すると思っているのです。そして、うまくいったのは自分の知恵と努力に成果だと思っていませんか。

また、その都合よく進むことを妨げる様々なものを排除しようと努力します。(中略)しかしよくよく振り返ってみると、私が単独で何かを成し遂げるなどと言うことができるのでしょうか。私が生まれたのも、今日まで生きてくることができたのも、隅から隅まで誰かに助けてもらったり、何かに支えられてきたのです。出来たこと一つ一つは、想像を絶する様々な要素が関係し合い、またその要素の一つ一つが単独ではないのです。

「恩」という言葉があります。インドの「カタンニュー」という言葉を、中国語に翻訳するのに、この「恩」という字を使いました。「カタ」と言うのは「(私のために)為された」という意味です。「ニュー」は「知る」という意味です。すなわち「私のために為された様々を知る」ということです。ですから、私の心に留められている、してもらったこ

と、また私を支え、成り立たせてくれている一切の要因を「恩」という言葉が示しているのでしょうか。その恩に心を寄せ「ありがとうございます」と感謝の思いを込めて、私たちの先輩方は「おかげさま」という言葉を使ってきました。その恩を知り喜び感謝する営みと、少しでもそれに報いたいと、出来ることを惜しまずさせていだこうと言う営みを「報恩」と言います。「南無阿弥陀仏」と言うお念仏は「報恩行」と言います。私たちは、親鸞聖人のご命日を縁として「報恩講」をお勤めします。これは単に恩があるからお返しをすると言うことではなく、私が生きるということを支え、成り立たせている根源的なことに思いをいたし、報恩行につとめようと言う思いを確かめる仏事なのです。この私は、いつでも、どんな状況にあっても仏様から願われた存在であり、目覚めを促すはたらきをいただいているのだと、人生をかけて明らかにしてくださった親鸞聖人の教えを確かめ直すのが「報恩講」の大切な意義ですね。(「仏教のぶっ—仏教はじめの一步—」より)

第2組報恩講案内

日時 11月11日(木) 14:00

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)

内容 お勤めと法話、同朋総会

講題「あるべきときるべき一明恵上人と親鸞聖人—」

講師 山口知丈先生

(第9組昭徳寺住職)

参加費 500円

⑤ お斎はありません

申し込み 11/6(土)までに、お手次の寺院にお申し込みください。

絶対他力の大道

清澤満之師(林曉宇先生訳)

第3章

私共は死なねばなりません。たとえ私共は死んでも私共はそれで滅びてしまうものではありません。生ばかりが私ではなく、死もまた私であります。私共は生死を合わせ持つ者であります。私共は生死を超えた存在であります。けれども生死は私共が自由に選ぶことの出来るものではありません。生死は全く不可思議な他力のはたらきによるものであります。故に私共は生死についていたずらに心を悩ますべきではありません。生死すらそうなのです。ましてやそれ以下の出来事については、何を悲しみ何を思い煩わずらう必要があります。私共はむしろこの変わり詰めの世の中にありながら、ひたすら絶対他力のたぐいなき仕組みを喜びたたえていきようではありませんか。(つづく)

選ばず、嫌わず、見捨てず

如来の摂取不捨の心と言う。

この言葉をお聞きしたのは、大谷専修学院長の狐野秀存先生の講話で、先生は竹中智秀先生から、宗祖親鸞聖人の摂取不捨をかみ砕いた言葉として教えてくださった。

でも、我が人生を振り返ると、まさにこれとは真逆の生活をしてきた。そうした私たちを親鸞聖人は「無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと水火二河のたとえにあらわれたり」(一念多念文意)と言い当てられている。その私たちを、聞法によって、「ああ、そんなわたしであった」と気付かされ頭が下がることで、「えらばず、きらわず、みすてず」という教えに、少しは近付くのかなと、思う一年でした。顔を合わせて、語り合うということがいかに大切かを痛感した一年でした。(本)

第2組聞法会開催



2021年9月27日(月) 午後2時より、天王寺区の佛足寺(清水拓住職)を会場に、コロナ感染予防対策として、隣の席との間隔を十分とり、今年度2回目にして、最終回の第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」が開かれました。

講師は新田修巳先生(平野区正業寺)で、前回に引き続き天親菩薩章、ことに「帰命無碍光如来」のところを話されました。

「帰命無碍光如来」この言葉は「阿弥陀如来に南無(帰命)しなさい」と言う、いのちの呼びかけであり、私たちは「尽十方無碍光如来に帰命いたします」という応答する言葉であると。

生老病死は誰も逃れられない運命であるが、ことに死と言うこの世と別れていくと言うことは、壁にぶち当たったように、どう答えていいのか、答えが見いだせないのではないのか。

高見順氏は詩集『死の淵より』で、人生は、帰る旅と言われる。教えを聞いて頭が下がるとき、生老病死を尽くして行ける道を歩むのであるとしみじみと話されました。

参加者は19人でした。
(レポート 細川克彦〈佛足寺〉)

如是我聞 新田修巳師の法話から 細川克彦(佛足寺)

新田先生は「正信偈」天親菩薩章の「帰命無碍光如来」について話された。



2014年に放映された「クローズアップ現代」で100歳を迎えた人の特徴として、①多幸感が

ある②独特の「超越」と言う精神世界を持つ③目に見えない人や世界との交流(つながり)を感じるので、孤立感がない④達成感がある、と挙げられていた。

しかし、私たちには越えがたい「死」の問題がある。この世と別れてゆくと言うことが壁にぶちあったように分らない。

先生が25歳の時に会われ、熱心な聞法者であった萩原よし江さんと言う歌人は「色身の

果つるきはまで 負いゆかん宿業かなし 御名称えつつ」と言う短歌を詠っておられる。逃れることの出来ない「生老病死」と言う宿業に捨てきれない愛着があり、それが愛おしい。そんな私であるが、御名(名号)の中に、全身に降り注ぐ如来の光と如来の眼差し(大悲)を感じつつ、生きていくことを詠っておられると。

休憩の後には「無碍」と言うことについて『唯信鈔文意』に、①さわりなし②光明なり③光明は智慧のかたちなり、と教えてくださっている。



また『教行信証 行巻』に「(一道)は無碍道なり。(無碍)は、いわく、生死すなわちこれ涅槃なりと知るなり。かくのごとき等の入不二の法門は無碍の相なり」を引かれ、不二の法門とは生死即涅槃と言うことであり、生も、老いも、病も、死も本来に受け止めて生き、死んでいくことを教えていると。

また、回復が期待できない病気の人を見舞うことが、何かためられるのは、生は善いことで、死は悪いことと言う、善し悪しの分別である。本願の言葉に目覚めてみると、いのちの智慧をいただいて、「また(お浄土で) お会いしま

しょう」と今生の最後の出会いに、いそいそと出かけることができるのではないのか。

教えを聞く中で、本願の光(智慧)と、大悲(愛)に触れ、頭が下がるとき、生老病死を尽くしていける人生をいただいでいくのであると話された。

あゆみの会総会 ～同窓会に参加しませんか～

みなさん、コロナウイルス感染拡大で、この2年弱、かつてない経験となりましたがお変わりありませんか。

第2組でこれまで10数年来ぶりに宗祖親鸞聖人750回御遠忌待ち受け事業として第2期養成講座が、第2組あげての取り組みで開講され、無事に2008年本山研修を修了し、12月にその仲間を中心にあゆみの会が準備会として結成されました。その私たちを、とりわけ即應寺の藤井善隆住職(当時)が手取り足取りで指導いただいて基礎ができ、2013年には第3期修了者が、そして2017年には第4期修了者に参加していただいて、総勢40名近くの仏法の教えで結ばれた会員となった。創立から10年以上が経過し、会員も歳を重ね、全員が集うことは難しいが、その絆を「あゆみ通信」が支えていると自負している。

コロナ緊急事態宣言が解除になった今、本山研修の御影堂での誓いを思い出して、久しぶりに顔を合わせる同窓会にご参加ください。楽しみに待っています。

記

日時 12月12日(日) 13:30
会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 総会(事業報告、会計報告、事業計画、予算案など)と法話。

講題「真宗門徒の念仏生活」
講師 藤井善隆先生
(即應寺前住職)

参加費 無料

なお、2022年年会費(2000円、ただし、ご夫婦会員3500円)を受付ます。よろしく。